

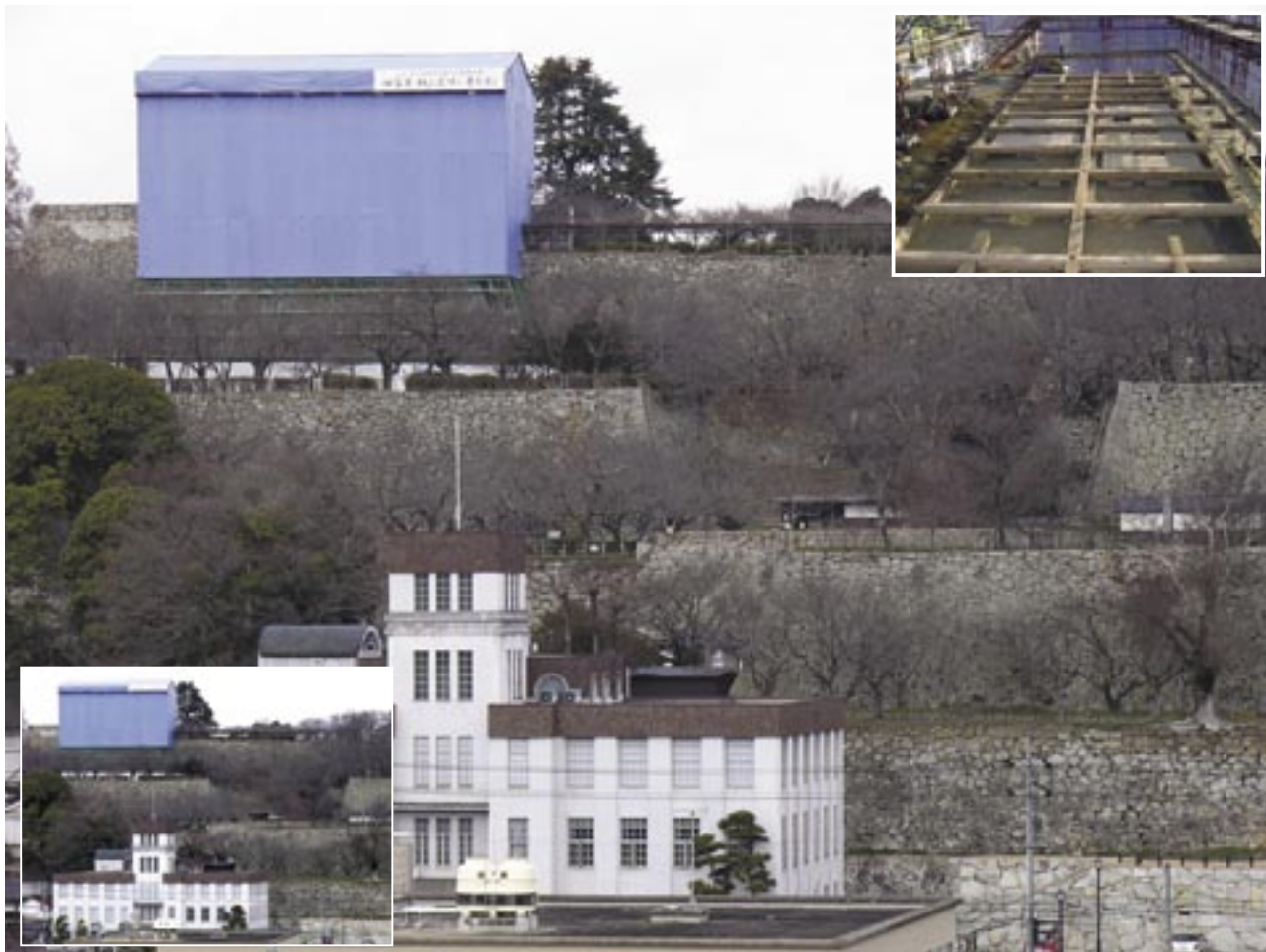
津山城だより

TSUYAMAJODAYORI

No. 4

2003年3月

津山市教育委員会
津山城整備推進係



備中櫓の本体工事に着手しました。

「津山城だよりNo.3」を刊行してから3年が経過しました。続刊が大変遅くなったことをお詫びしながらNo.4をお届けします。

平成11年度に「備中櫓復元整備基本計画」を策定した後、平成12年度では正式に復元事業を行うために「史跡津山城跡備中櫓基本設計」を作成しました。

その後、幾度かの協議を経て、平成13年6月7日付けで文化庁から正式に備中櫓復元についての現状変更許可がありました。7月3日から実施設計に取りかかり、平成14年1月16日に起工式を行いました。

工事は覆屋の中で行われているため、外からは様子を窺い知ることはできませんが、平成15年1月末までに礎石を据え付けて土台の木組みが完成しました。土台は栗材で岐阜県の山中から切り出したものです。

続いて2月上旬から柱の建て方を開始し、26日に無事上棟式が上の写真のとおり執り行われました。

平成15年度以降は、瓦葺き工事、壁塗り工事等が中心になり、築城400年の年である平成16年度末までには本体が完成する予定です。

これまでの発掘調査の概要

平成 11 年度

本丸の表御殿に相当する広間、大書院、小書院の東側、及び備中櫓跡の調査で確認していた築城期と思われる石垣を追及するために実施しました。表御殿の調査では火災（1809）前後共、絵図どおりの遺構を検出することができました。中でも、大書院の北側に位



写真1 「水溜め」



写真2 築城期の石垣



写真3 「囲炉裏」

置する「水溜め」（写真1）は非常に良く残っていました。

築城期の石垣は五番門の西側で直角に折れ、北方向に延びていることが判明しました（写真2）。

平成 12 年度

本丸の表御殿西側、及び備中櫓北側に築かれていたとされる石垣を確認するために実施しました。表御殿西側の調査では、囲炉裏跡（写真3）、井戸跡など東側の調査同様、ほぼ絵図どおりの成果が得られました。

備中櫓北側の調査では、石垣の基礎となる礫敷が検出されたことから、かつて石垣が実在したことが確認されました。また、この礫敷を切って排水施設である「万年」（写真4）が見つかりました。埋土からは「作」刻印瓦が出土しています。

平成 13 年度

本丸御殿の西側、及び築城期の石垣を追及すめために実施しました。火災前の御殿西側の「御庭」に相当する部分において、「魚だまり」遺構（写真5）を検出しました。

五番門の西側で確認されていた旧石垣は六番門までは延びていないことが判明しました。



写真4 「万年」



写真5 「魚だまり」

これまでの工事の状況

管理道設置工事

石垣修復工事、備中櫓復元工事をはじめとする各種の保存整備工事を行うための道路が平成12年度に完成しました。この道路はあくまでも工事用の道路であり、平均勾配が18%という急な坂道です。安全性のためにも一般の利用はできません。



五番門南石垣修復工事

下の写真のとおり津山城の中で最も崩落の危険性の高い石垣であると同時に、備中櫓復元に伴う塀が取り付くことから、備中櫓復元整備工事に先立ち平成12年から13年にかけて解体修復工事を行いました。

石に一つ一つ番号を付けて取り外し、積み直していきました。割れている石、失われている石は津山城の石垣の石材（凝灰岩）と同じ種類の石を産出する兵庫県高砂市から切り出して運んできました。

解体修理の結果、この石垣はもともと地盤が弱く何回か崩壊と積み直しを繰り返していることがわかりました。

積み直し時には、石の沈下が予想される部分をあらかじめ補強し、石垣が変形しないよう施工しています。



五番門南石垣解体修理写真。左上から解体修理前、解体修理の様子、解体修理完了後の写真。

解体修理前には今にも倒壊しそうな状況であった事が写真から伺える。



津山城資料編 続編も発行しています。

平成11年度に『津山城資料編』を発刊しましたが、その後新たな資料も見つかったことから、平成12年度に『津山城資料編Ⅱ』を刊行しました。さらに、平成13年度にはこれら資料の解説として、『津山城資料編解説』を出版しました。今後とも、資料調査は継続していく予定です。



備中櫓とは？

一面でお伝えした備中櫓の復元整備工事ですが、そもそも備中櫓とはどのような櫓であるのか、説明いたします。

位置と規模

備中櫓は本丸御殿奥向きの更に奥、天守の南側に所在する二階建ての櫓です。高さは約13m、幅約24m、奥行約8mで延べ床面積は約288㎡となっています。木造一部二階建てで屋根は本瓦葺き、外壁は白漆喰の塗込となっています。

構造

櫓の内部は通常板敷きあるいは土間ですが、この備中櫓の内部は全室畳敷きという特徴を持っています。また、一階には「クマリ」を備え付けた本格的な「御茶席」や、「御床」「違棚」を備える「御座之間」が存在し、二階の北西部には「御上段」を設けているなど、津山城本丸奥御殿の一部として機能しており、数多い津山城の櫓の中でも特殊な性格をもった櫓であると考えられています。

名前の由来

さて、この「備中櫓」という名称ですが、『森家先代実録』によると、「備中矢倉、池田備中守長幸入来之節出来」とあります。櫓の名称は、この「池田備中守長幸」に起因するといわれています。森忠政は、長女於松を鳥取城主であった池田備中守長幸に嫁がせており、忠政にとって長幸は娘婿にあたる人物です。その長幸が津山城を訪れるのを機に、作られたとされるのも、あながち否定できないのではないのでしょうか。

備中櫓が池田長幸に因んで建てられたという根拠について、備中櫓の発掘調査時に池田家の紋である「揚葉蝶」が刻まれている瓦が出土している事が注意されます。因みに森家の紋は「鶴丸」であり、この建物が池田家に何らかの関係を持つと推定させるに十分な資料であると考えられます。



備中櫓完成予想図（左下は明治初年撮影の古写真で中央が備中櫓）

築城400年記念事業について

来年平成16年は津山城の築城開始から400年の節目の年にあたります。

津山市ではこの年を「21世紀の新しい津山のまちづくり」のスタートと位置づけ、平成16年4月1日から平成17年5月5日までの400日間、各種の記念事業を計画しています。

また、賛同いただける方々にはこの事業への協賛金の募集も行っております。

これら事業の詳細については、津山市企画部津山城築城400年記念事業推進室（TEL:0868-32-2023）までお問い合わせください。